22) 陸前松島　　July, 1899　　拓　植
　　〃　　〃　　〃

上の22枚の標本中生殖器托のあるものは僅かでその内4番では生殖器托は全部雄性であり，ハハキモクの特徴である「同一生殖器托中に雄の生殖窠と雌の生殖窠とが混在する」と一致しない。然るに1番の駿州江ノ浦の標本は此の性質を示している。そして他の七里ケ濱等の標本では生殖器托は存するが若くて性別等は判然としない。

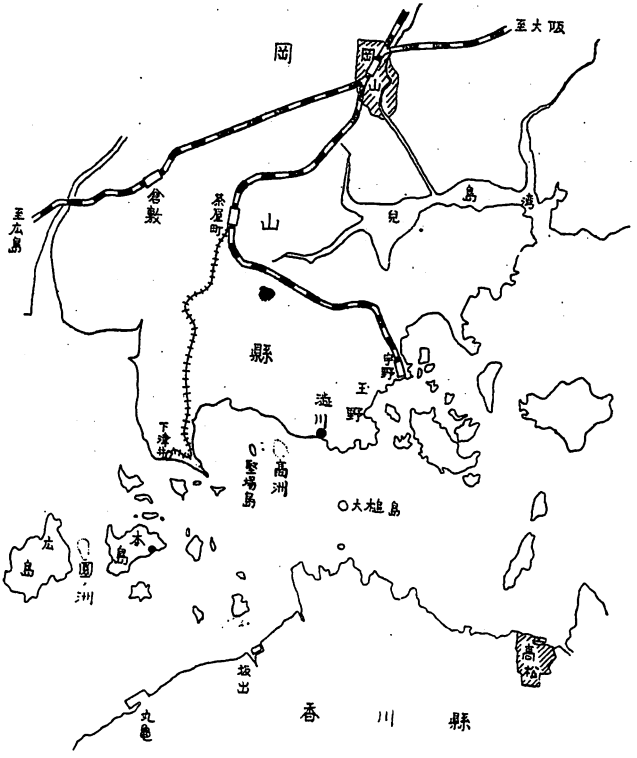
即ち遠藤博士の標本中で同一生殖器托中に雄と雌の生殖窠の混在することの判然としているものは駿州江ノ浦の標本のみということになる。然るに此の產地は遠藤博士の "Fucaceae of Japan" にも又それより前に發表された日本產馬尾藻科目錄中にも引用されていない。つまり遠藤博士の *Sargassum kjellmanianum* という種の考えは純粹なものではなくして他の種即ちミヤベモクの如きものが混じていた樣に思われるのである。

(北海道大學理學部植物學教室)

岡山大學玉野及び本島臨海實驗所とその附近の海藻

猪野俊平

瀨戸內海國立公園の中心地である玉野市の澁川海岸につくられた岡山大學理學部玉野臨海實驗所は，國鐵宇野驛よりバスで約25分，澁川で下車して徒歩で3分，岡山驛より約1時間半でいける便利な新しい研究所である（第1圖參照）。坪數67坪のコンクリート平家建で（第2圖），實習室1，研究室3，圖書標本室1，暗室1と宿泊用の6疊の和室が2つあつて，各研究室には海水及び淡水が通してある。殊に實習室には，海水水槽4と淡水水槽2とがあつて培養に便である（第3圖）。また同時に建てられた玉野海洋博物館の水族館（第4圖）は47個の水槽と他に3個の豫備水槽，小ガラス水槽9，屋外，屋內に1個づつのプール狀の大飼育槽があつて，海水は5馬力のモーター（他に同馬力の豫備ディーゼルエンジン）で揚水し，水族館と實驗室へ同時に通しており，配水は全部開放式で，配管はビニールも用いている。水族



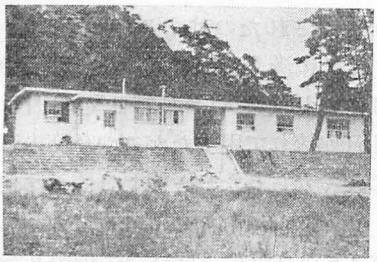
第1圖　岡山大學玉野及び本島の臨海實驗所の位置を示す地圖

館の指導は常住の所員3名がこれに當つている。實驗所の所員としては所長には，岩田清二教授兼任で，他に大羽滋助教授，渡邊宗孝助手，廣江三樹三郎助手の3名が常住しているので使用者は御連絡になればよい。また同實驗所は，塩飽(シアク)群島の中心にあたる本島に，本島支所を設おけている。同建物は，52坪の平家（第5圖）で，實習室1，研究室3，暗室1，作業員室1その他で，各研究室には淡水のみが配水されていて，海水はすぐ前の濱からくみとる點多少不便であるが，採集には至便である。

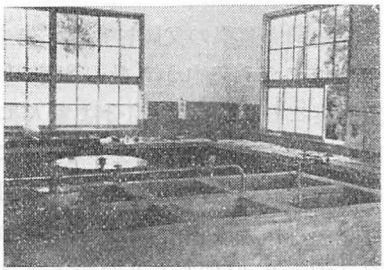
同實驗所附近の海藻の採集地としては，澁川附近の高洲(タカス)，大槌(オオヅチ)島，本島附近の園(ソノ)の洲(ス)，小瀬居(コセイジ)島(マ)などが代表地で，その他大小の塩飽(シアク)の島々がある。未だ組織だつた調査は行われておらないが，今日迄に廣瀬弘幸博士，猪野ら

が採集した主なものを擧げれば次のようである。

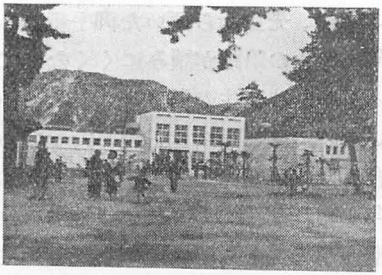
リビュラリア，カロスリックス，ユレモ，リングビア，シゾスリックス，アイミドリ，などの藍藻類，アナアオサ，ヒラアオノリ，スジアオノリ，ボウアオノリ，ウスバアオノリ，ヒトエグサ，シオグサ，ハネモ，ミル，イモセミル，クロミル，ハイミル，フサイワヅタ，ホソエガサ（園の洲，高洲）などの綠藻類，シオミドロ，ラルフシア，クロガシラ，ネバリモ，クサモヅク，フトモヅク，ケウルシグサ，ハバモドキ，フクロノリ，カゴメノリ，カ



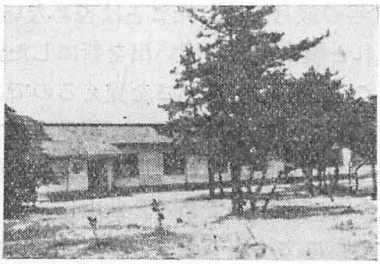
第2圖　岡山大學玉野臨海實驗所の外景



第3圖　實驗所の實習室の水槽



第4圖　玉野海洋博物館全景



第5圖　岡山大學臨海實驗所本島支所

ヤモノリ，イシゲ，アミジグサ，オキナウチワ，ウラボシヤハズ，ツルモ，ワカメ，ウミトラノオ，ヤツマタモク，ヨレモク，マメタワラ，ホソバモク，サンデーモクの褐藻類，ウミゾウメン，ハイテングサ，ムカデノリ，サンゴモの類，ベニマダラ，マツノリ　オキツノリ，ツノマタ，ホソバミリン，フクロフノリ，オゴノリ，イソダンツウ，タオヤギソウ，イギス，ケイギス，トゲイギス，ヨツノサデ，ウブゲグサ，クスダマ，シマダジア，ダジア，オオカザシグサ，フジマツモ，ミツデゾゾ，ショウジョウケノリ，イトグサ，ユナ，ヤナギノリ，ヒゲベニハノリ，ジャバラノリ，カギケノリなど紅藻類

が擧げられ，他にアマモ，コアマモ，ウミヒルモの海草も見られた。

(岡山大學理學部生物學教室)

岡村先生の思い出

山田幸男

我が國海藻學の父岡村金太郎先生が逝去されたのは去る昭和10年8月21日であるからそれから此の8月21日までに滿19年が夢と過ぎた譯である。丁度この21日の朝自分は家人に向つて19年前の今日明日又23日も東京は隨分暑くて御通夜の晩等も帷子でも汗が流れて困つたがこの今朝の涼しさは何ということだろう。今日が先生のなくなられた日と同じ日等とは迚も想像も出來ない等と話したのであるが，然しこれは北海道は札幌での話しで東京は矢張り40何年ぶりの暑さであつたというから，東京では矢張り先生の御命日にはふさはしい暑い日であつたといえようか。兎に角あれからもう19年の歳月が流れたことは否めない。其の日，先生から頂いた御手紙をあれこれと讀み返して憶い出を新にしたが年々先生の筆蹟が讀みにくくなつてゆくことを感じて悲しさを覺えるのである。それは先生の御手紙は仲々讀みにくく，始終御手紙を頂いて讀み慣れていた時にはスラスラと讀めたのであるが御逝去後は勿論新に御手紙を頂く機會もなく自然に先生の筆蹟が讀みにくくなつて來たのである。此處に昭和4年12月 W. H. HARVEY の標本を勉强する爲にアイルランドのダブリン市に滯在中先生から頂いた御手紙を御披露してなき先生を偲ぶよすがと致し度い。

11月25日，昨日は朝9時頃5°C，本年の最初の寒さ。

何より悅しき事は恩師 FR. SCHMITZ の肖像を得たことです。早速机上に供へ拜謝しました。實に我邦海藻學の大恩人，多年その小影に接し度いと思てゐたもの故一層嬉しく存じ候，厚く御禮申候。藻類系統學（書名を斯くしました）も今褐藻類の初校を了つた丈けです。多分來年3月頃發賣となることでせう。

SAŬVAGEAU : Sur l'alternance des generations chez le *Carpomitra ca-*